

スリランカはインドの南東に在り、インド洋に浮かぶ島である。

真珠の涙とか翡翠^{ひすい}のペンダントとか形容される程、心象^{しんしょう}は美しい。

面積は日本の北海道の8割に当たり、現在の人口は2000万人余である。スリランカ政府と「タミル・イーラム解放のトラ(LTTE)」による内戦が1983年から2009年にかけて続いたが、スリランカ政府軍がLTTE支配地域を制圧して26年にわたる内戦は終結した。この内戦後、急激にスリランカ観光に訪れる欧米人、ロシア人や中国人が多くなった。日本人も例外ではない。私自身、タランガッレ・ソーマシリ師とご縁をいただいて以来、仏跡のほとんどを巡拝した。然し、まだ知らない所が沢山ある。「マヒヤンガナ」だ行ってないのにと云われてしまった。マヒヤンガナとはパーリ語で「平ら」という意味である。仏陀が初めて訪れた場所である。キャンディの丘陵を車で走ると、壮大な自然風景が見える。マハウエリ川辺りには滅びゆく先住民ヴェッダ族が住み、仏陀が訪れたといわれるマヒヤンガナ寺院がある。マヒヤンガナの世俗から離れた森の暮らしの中に「足るを知る」仏教精神を垣間みると同時に人間としての生き方の何かを示唆してくれる。「ヴェッダ族」に伝わる物



語は、伝説と事実が混入しているかもしれないとお断りの上で、ソーマシリ師が語って下さったのは生きた旅案内である。

🔱「ヴェッダ族」の伝え語り

大昔、ヤクシャ(鬼)とナーガ(蛇)とデーワ(神)が住んでいた。その中で鬼が一番強かった。マヒヤンガナのマハーナーが苑で集会を開いていた或る日のことである。鬼が集会後に争いをするのを予知していた仏陀は、止めさせたいと苑内に座る場所をほしいと申し出た。鬼は仏陀の言葉を聞かなかった。仏陀は死者を出さないために空から飛んで来て、自分の体内から水を放ち苦しめた。更に熱い火の炎を放ったので鬼は降伏したという伝説がある。

仏陀はその時に「心の平和」に関する説法をされた。聴衆の中に神のリーダーことサマン神がいて、仏陀の説法を深く感動した。今後「その教えを敬う^{うやま}対象として、仏陀の何かをいただきたい」と申し出た。すると仏陀は自分の毛髪を抜きサマン神に与えられた。神は大切に持ち帰り黄金の壺に入れ、仏塔に安置した。その仏塔がマヒヤンガナ寺院であると云う。仏陀の存命中の紀元前528年1月の満月日に建立されたと伝えられている。

そう聞けばコロomboのケラニヤ寺院の壁画に、先住民に聖髪を贈る姿が描かれているのをみたことがある。マヒヤンガナは仏陀の歴史舞台となっているのであろうか？ スリランカの各地にも同様な壁画をみることができると云う。この伝え語り^{うやま}が事実のようなペラヘラ祭が8月に開催されている。キャンディやカタラガマに負けず劣らずの大規模な祭で、仏陀来島時の余韻が味わえるそうである。ヴェッダ族も加わる盛況なパレードはマヒヤンガナ、ペラヘラ祭のみで、独特の宗教儀礼となっている。



弓と矢を持ったヴェッダ(1890年当時)



首長。地域不詳(現代)

(2枚ともウィキペディアより)

する。さて、ヴェッダ族の近ごろの生活模様を話して下さったところに依ると、男性は腰巻き姿で肩に斧おのをかけた出で立ちが正装(フォーマル)である。大統領との接見も勿論、上半身は着衣なく対面されていると云う。女性はあまり見かけられない。家屋は客間の外に1部屋あるいは2部屋があり、土壁で仕切られている。屋根は椰子の葉を編んだもので原始的という何か? 全て自然重視で、

近年の「ヴェッダ族」の伝え語り

ヴェッダ族は、元から住んでいる人とか森の人とか称され「スリランカ人のルーツ」とされている。文字を持たず象形文字を持つ民族である。キャンディの街から1時間半位、車で、東方70km余の小さな町マヒヤンガナに人口2500人程度、更に20kmの場所ダンバナ村にヴェッダ族のボスと約100人の仲間が暮らしている。一か所に定住せず、弓矢や槍を用いる狩猟なりわいを業として農耕はしなかった。もとを辿れば、北インドから渡来したスリランカ建国の王(ヴィジャヤ王子)を父として、スリランカに住んでいた鬼族の女の間に生まれた子どもが祖先だと伝えられている。一般の書物では、北インドから最初のシンハラ人がスリランカに辿りついたのが紀元前5～6世紀だとある。他方、紀元前483年、北インド王の息子ヴィジャヤは蛮行のため死刑執行予定で船に乗せられたが、運良くタンバンニ(スリランカ島)に着いた。やがてアヌーラダブラを統治し、シンハラ族の王国を築いたと『マハーワンサ』^(注)に記されている。シンハラ人が移住する前は、スリランカは鬼(ヤクシャ)の棲む島として恐れられていた。鬼とはヴェッダ族を指していると思われる。従って時期的に一致

人間としてのルールを守り鹿肉、蜂蜜、象牙など採集し農作物と物々交換で生計をたてていた。

時代と共に国情が変わり、動物の殺生も禁じられた。マハヴェリ開拓プロジェクトにより、政府に土地を取り上げられて移転させられた。開発が進むとシンハラ人との結婚で、同化が進み、先住民として系譜は消え終わろうとしている。残るヴェッダ族は、自然の中でご先祖から継いできた暮らしの知恵を、そのまま生かしている。例えば、マッチを使わず火を起こす方法は実に上手である。私たちは物見遊山よろしくの態だが、逆にそれを嫌がらず、歓待するかのようである。森で採取した蜂蜜や動物の骨や歯で作ったネックレスや腕輪、インテリアなど小さなみやげものの出店が並んでいる。現金で購入したり販売することも見られるようになってきている。新しい観光エリアとして、業界から視線も向けられる日は近いと予感がする。日本で云えばアイヌ民族にも共通するヴェッダ族は、アイデンティティを失わず、誇りをもって生きていくに相違ない。

■注

マハーワンサ：スリランカの王についての物語をパーリ語で詠んだ叙事詩である。(ウィキペディア抜粋)